



ファインスチール

Winter 2026

冬



CONTENTS

01 特集1

一般社団法人

利根沼田テクノアカデミー 視察ツアー!!

07 特集2

令和6年度「みやぎCLT普及促進事業補助金」採択事業

佐元工務店新社屋

11 建築めぐり

ウォートルス伝 38 丸山雅子

13 街でみかけるファインスチールの施工例 その62

一般社団法人

利根沼田テクノアカデミー

視察ツアー!!



関越自動車道沼田インターから利根川沿いに車を走らせていると、旧南郷小学校の校舎に「TONE NUMATA TECHNO ACADEMY」の文字が!

廃校となった学校を利用しているようで、グラウンドやプールなどあり、子どもの頃を思い出してセンチメンタルな気分になっ

おっと、これから始まる視察、しっかり皆さんにお伝えしなくてはいけないので、気を引き締めていきますね!!



群馬県沼田市に拠点を構える、利根沼田テクノアカデミーさんに全国ファインスチール流通協議会メンバーとファインくんが突撃視察!

建設業の若い担い手を育成することを目的としたアカデミーさんの取り組みをご紹介します!!



利根沼田テクノアカデミーとは?

参加した方が教室に集まり、スライドを見ながら、利根沼田テクノアカデミーの説明を聞きました。



●まずは、桑原敏彦校長によるお話し。

利根沼田アカデミーの成り立ちや、夢など熱く語っていただきました。建築業界の一員として、職人さん減少による危機的な状況を憂い、国土交通省や地元の沼田市に働きかけ、2016年4月ついに開校。全国ファインスチール流通協議会メンバーは真剣に話を聞き、スライドを食い入るように見ていました。真剣にメモを取っているメンバーも!視察に行ったのは、8月末。校長の熱い話もあり、教室全体がますます暑くなっていました^^



●次に、ALL WIN協同組合の村田豊代表理事より、板金村プロジェクトについてのお話し。

茨城県水戸市で金属屋根壁工事を請け負う、株式会社MURATAの代表取締役としてご活躍しながら、ここ最近の板金職人さんが減っていく現状をなんとかしたい!という思いから、外国人を受け入れ、職人さんとして養成することに力を入れる板金村プロジェクト活動をお話しいただきました。



私たち、全国ファインスチール流通協議会メンバーも職人さん減少に大変危惧を抱いていて、このような現場職人さんの育成活動に大変心強く思いますね!



さまざまな施設を視察!

教室での熱い話を終えた一同、次に向かったのはさまざまな施設。

●最初に見たのは、宿泊部屋。

学校の校舎の2階を改築した綺麗なスペース。ここで宿泊まりした未来の職人さんはどんな夢を見たのだろうか、と感慨深くなってしまいました。

移動途中の廊下の途中には一日のタイムスケジュール!!	
起床	7時
朝食	7時30分
掃除	7時45分
授業開始	8時
昼食	12時
午後の授業	13時～17時
夕食	18時
入浴	19時～21時
就寝	22時

移動途中の廊下の途中には一日のタイムスケジュール!! 午前午後とみっちり訓練しているんですね!



ボク、毎日できるかなっ



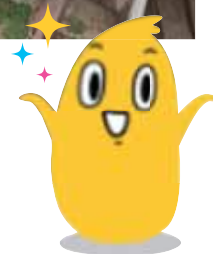
●続いて体育館へ。

ここでは、屋根伏せ訓練だけでなく、左官訓練や大工訓練、塗装訓練など完備!雨天でも訓練できるようになっています! 棚には訓練生が、板金技術で作った作品もありました!



●次に、グラウンドへ!

広大な敷地にはビス打ち訓練やハサミ訓練、高所歩行訓練や長尺の屋根伏せ訓練など、さまざまな訓練施設がありました。



●なんと、視察当日には訓練生の練習に遭遇!!

桑原敏彦校長から、「皆さんにお見せして」と言われた訓練生は、照れながらも、真剣に練習していました。



●なんと、訓練生により、一から建てられたもの!?

グラウンドの奥にある戸建ての建物。これは、「板金技能」「大工技能」「左官技能」など、利根沼田テクノアカデミーで習得できる技能を駆使して完成させた建物!これには視察参加メンバーも舌を巻いていました!!



Before



After



視察を終えて

建築業界における人材不足は、現在の日本社会において深刻な問題で、特に板金の人材不足は喫緊の課題です。しかし、板金技術者は熟練を要する職種であり丁寧な訓練や経験が求められ、技術習得に時間がかかりますさらに、板金技術者は高度な技術力が求められるため、専門学校や研修などでの教育体制や継続的なスキルアップの機会が必要です。

材料があっても、それを組み立てる人材がいなければ、建物が立てられません。

我々全国ファインスチール流通協議会メンバーにとっても死活問題。

この課題に真正面から取り組む、利根沼田テクノアカデミーを、群馬県沼田市から日本全国に周知し、連携し、ともに建築業を盛り上げていきたいと思い、今回ご紹介させていただきました!!



上州名物といえば、「焼きまんじゅう」。

甘い味噌だれをつけて、焼かれたまんじゅうに「うま〜い!!」ほっぺたが落ちそうになりました。

機会がありましたら、ぜひ食べてみてください!



学校情報

一般社団法人利根沼田テクノアカデミー

建設業の担い手確保を実現するべく短期間で実践的な訓練により、専門工事業種の技能や知識を短期間で身につけると同時に、鉄骨上や屋根上での移動など安全管理を現場に出る前に身につけることで、新たに入職する方々が安全に仕事ができる状況を作り出す事を目的とする。

- 所在地
群馬県沼田市利根町日影南郷335-1
- HP
一般社団法人利根沼田テクノアカデミー
- 電話番号
0278-25-8852



「佐元工務店新社屋」

設計：齋藤 隆太郎 / DOG・東北工業大学

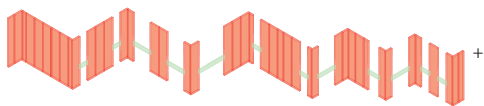


寄棟形式と谷勾配の流れ屋根形式の屋根材には塗装ガルバリウム鋼板の採用が決定。

「みやぎCLT等普及促進事業補助金」の採択事業である、宮城県仙台市の地元で根差す建設会社の移設計画を紹介します。

本誌連載中の「ファインスチールを使った建築設計例」の監修をお願いしている東京大学大月研究室出身の齋藤隆太郎先生が設計を担当。

● 建築の構成手法



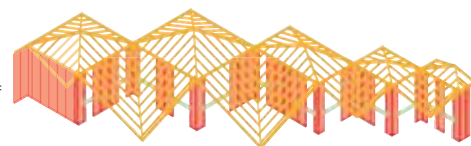
H=6,000mmのCLT材

屏風に見立てた壁に宮城県産CLTを用いるにあたり、宮城で唯一のCLTメーカーの最大製作寸法が6,000mmであることから、その製作限界を最大限活かし、2階建ての水平力負担構造「通し壁」としている。



寄棟形式と谷勾配の流れ屋根形式の屋根

6,000mmで壮観に並ぶCLT壁の上端ラインを揃えることを前提とした屋根架構を考えた結果、CLT屏風壁を境に、寄棟形式と谷勾配の流れ屋根形式が自然と導き出された。



不動のCLTと様々に変容する屋根架構の組み合わせ

6,000mm一定高さのCLTと、寄棟+谷勾配による高さが所々で変わる屋根架構の組み合わせが、空間の大中小を生み、多様な場所を生む。そして空間の変容と共に、不動のCLT壁が圧倒的な存在感を持って対比的に佇む。

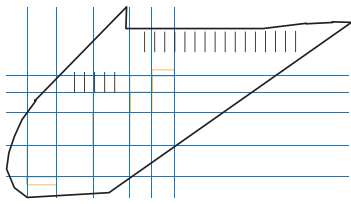
■ CLTを用いる設計条件

仙台市若林区の地元で根差す建設会社の新社屋移転計画である。仙台市だけでなく、宮城県全域にも工事範囲があるため、新社屋には宮城県産材や県産CLTを使いたいという要望があった。それは、私たちの設計事務所(DOG)がプロポーザルで勝ち取った友愛幼稚園(CLt使用)の記事が新聞に出たことで、CLTの補助金を用いた設計を行いたいということであった。

■ 快適さと訴求力の求められる設計

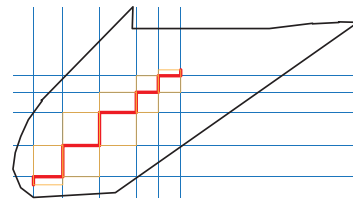
従業員がおよそ40名規模の建設会社の新社屋をつくるにあたり、快適なワークプレイスの創出はもちろん、ショールームやグリーンショップ、地域に開かれた会議室といった複合用途も求められた。また敷地も国道4号と宮城の萩大通りという2つの幹線道路に面していることから、建設会社のアピールに加えて、宮城県産材のアピール、グリーンショップへの集客も同時に求められ、いかに訴求力を高めるかという命題があった。





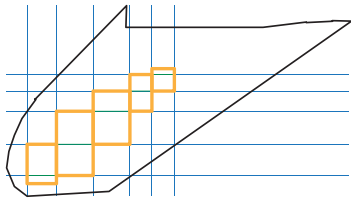
①軸の発見

変形した敷地形状に対し、最初に求められたことは「職員と職人、お客様の駐車場を最大限確保すること」であったため、それを満足できる軸(通り芯)の設定を行った。



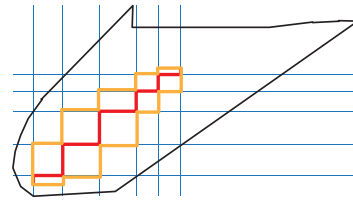
②ZIGZAG

発見した軸に対し、宮城県産材CLTの訴求力と構造合理性の両立を図りながら、空間のダイナミズムを追い求めた結果、ジグザグ状のCLT配置計画が導き出された。



③TANZAKU

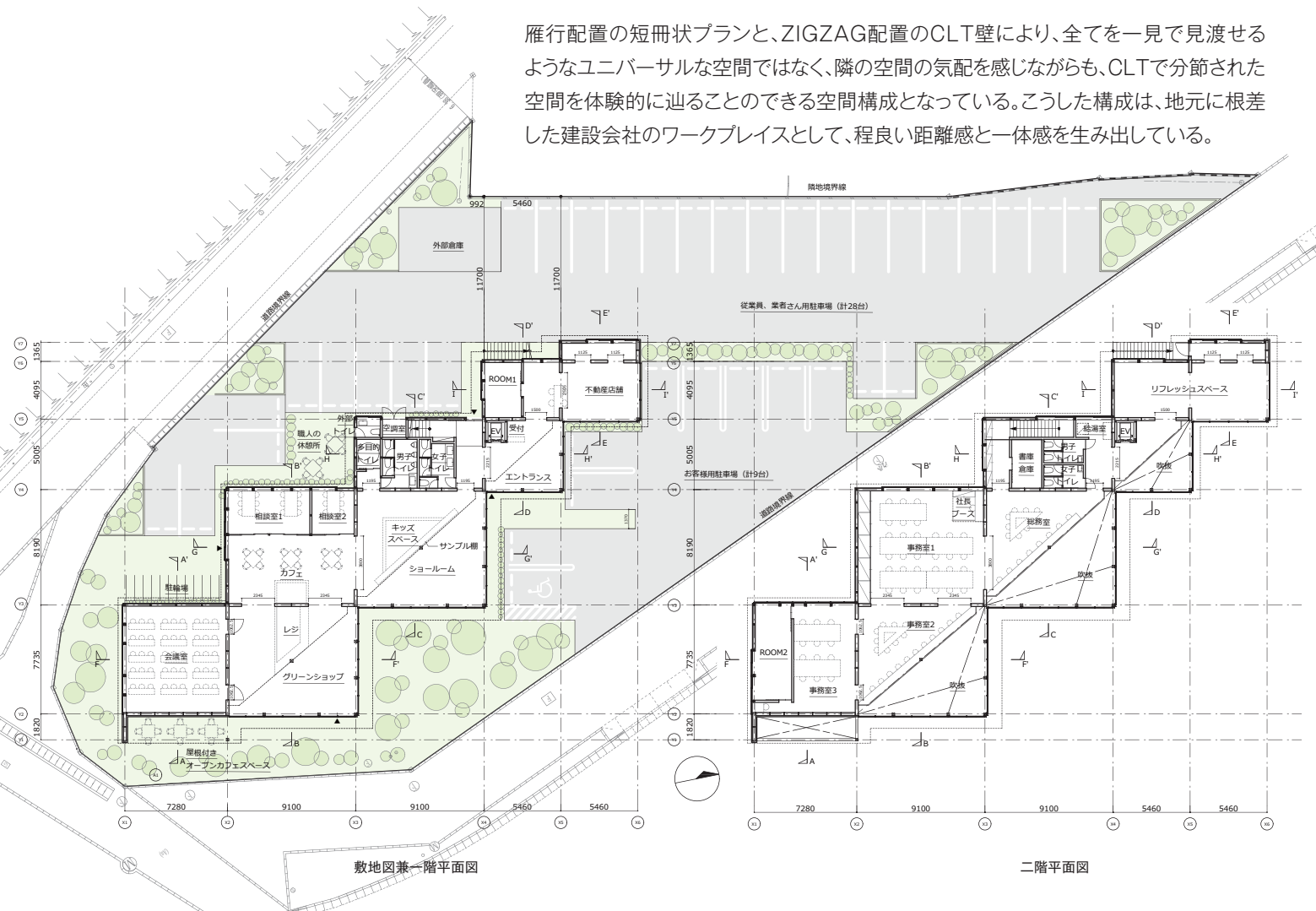
発見した軸に建築可能エリアを重ね合わせた結果、雁行配置の短冊状の空間構成が敷地にフィットすることがわかり、建築の表面積を大きく取ることで、地域への訴求力を高めた。



④(ZIG-TAN)ZAG

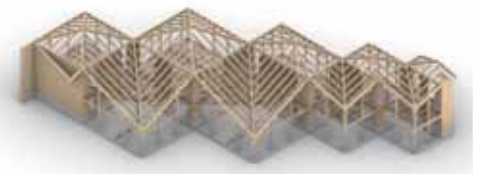
ジグザグと短冊を重ね合わせてみると、CLT配置が内部空間としてスッポリ納まり、60分準耐火でも燃え代現しによるCLTの素材そのものをダイナミックに用いることができる。

雁行配置の短冊状プランと、ZIGZAG配置のCLT壁により、全てを一見で見渡せるようなユニバーサルな空間ではなく、隣の空間の気配を感じながらも、CLTで分節された空間を体験的に辿ることのできる空間構成となっている。こうした構成は、地元根差した建設会社のワークプレイスとして、程良い距離感と一体感を生み出している。

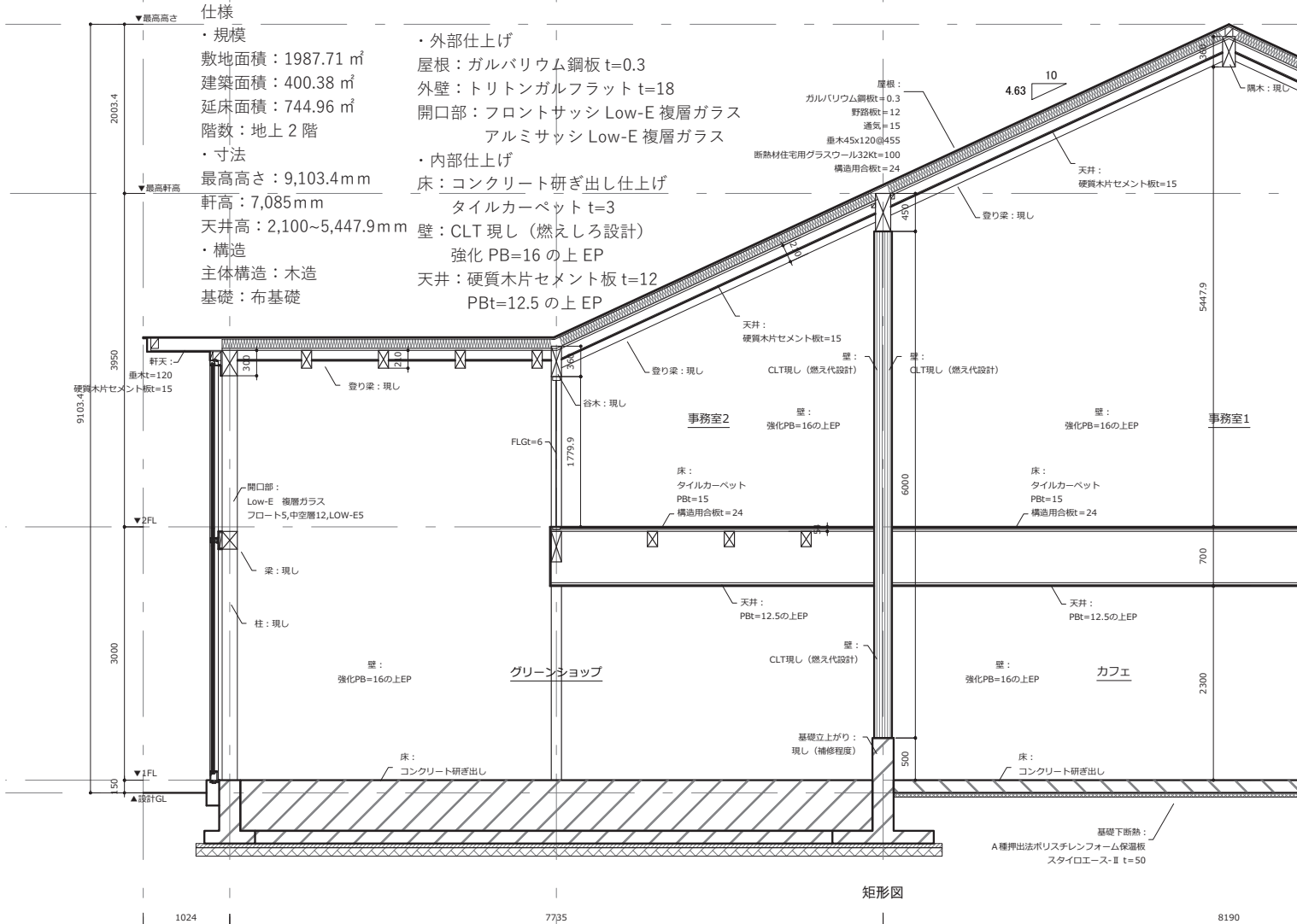


■ 初のCLT壁勝ち通し壁+軸組み併用構法(ルート3: 保有水平耐力計算)

宮城県産材CLTを用いるにあたり、宮城県で1社のみCLT製造が可能な「西北プライウッド」の製作限界寸法である1,200×6,000mmを基本として、およそ階高的に2層分としてCLT「そのまま」をダイナミックな建て方として行う計画とした。歩留まり良くCLT材を用い、2022年の改正告示によるCLT通し壁による壁勝ち架構と軸組み構法併用のルート3は、国内でも初の試みであり、県産CLTの最大寸法による圧倒的な存在感がそのまま立ち現れることで、県(林業振興)及び企業(佐元工務店)の訴求力に寄与している。

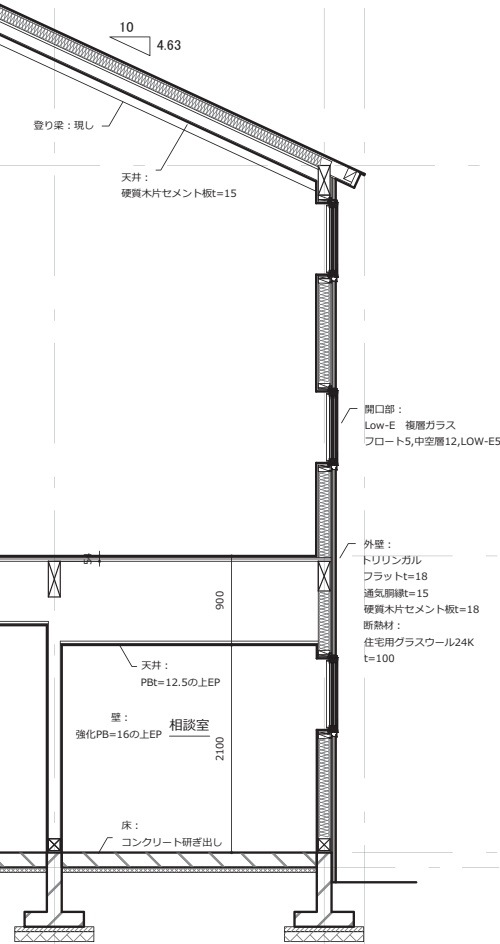


軸組アイソメ図



60分準耐火による燃え代設計

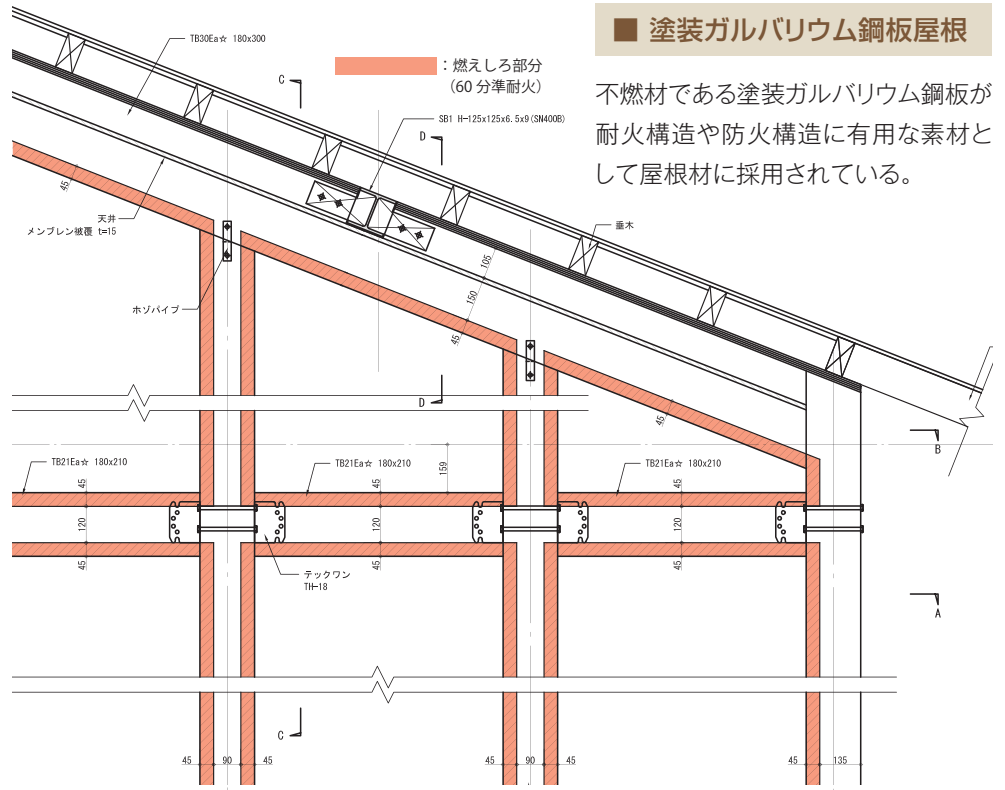
60分準耐火の燃え代設計により、CLT等の集成材は45mm、宮城県産JAS材は60mmの欠損を考慮して構造計算を行う必要がある。CLTだけでなく、2階天井を構成する梁架構もCLTに「乗っかる」意匠として現したいことから、硬質木毛セメント板を仕上げ材としてそのまま用いつつ、メンブレンを構成している。



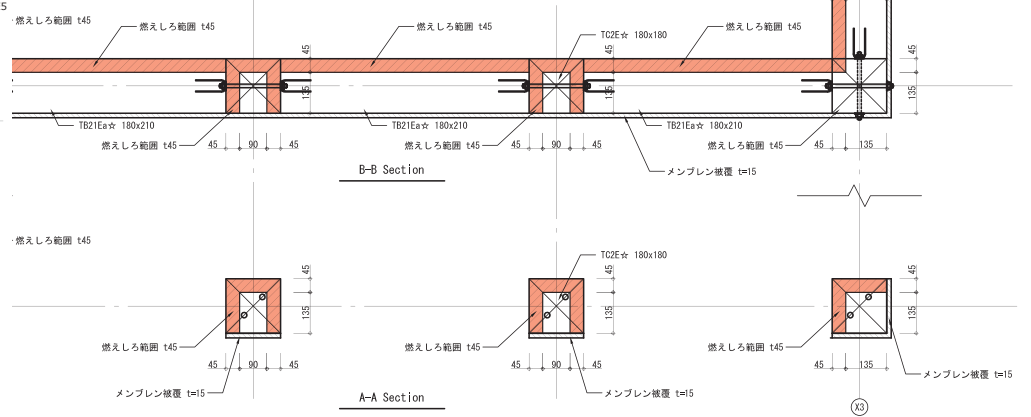
409.5
Y4

塗装ガルバリウム鋼板屋根

不燃材である塗装ガルバリウム鋼板が耐火構造や防火構造に有用な素材として屋根材に採用されている。



Y2通り 燃えしろ部分詳細図 S=1:10



「佐元工務店新社屋」は、2025年8月から着工しています。完成は2026年5月を予定しています。今特集では計画や概要、複雑な屋根形状について解説しました。完成後にあらためて「佐元工務店新社屋」について詳細な特集記事をお届けいたしますので楽しみに。



ウォートルス伝³⁸

アーネストが関与した テルライドの鉱山(3)

藤森研究室

担当 丸山 ^{もとこ} 雅子

コロラド州サン・ミゲル郡テルライドの東、サン・ミゲル川上流に位置するパンドラ(旧名ニューポート)は、19世紀末の一時期、単なる鉱山集落を超えた存在であった。周囲には、鉱区としてのパンドラ、選鉱場としてのパンドラが存在し、そのいずれにもアーネスト・ウォートルスは深く関わっていた。

(3-1)パンドラ鉱区(The Pandora mine)

パンドラ鉱区は1876年にマーシャル盆地に設定された鉱区である。規模は300×1,500フィート。金を含む石英を主体とし、少量の銀を伴う鉱脈を有する鉱区であった(注1)。

1880年8月、フランス資本のパンドラ・アンド・オリエンタル鉱山会社(Pandora and Oriental Mining Company、以下P&O社)が、パンドラ鉱区と隣接するオリエンタル鉱区を取得し、坑道や大規模なトロッコ軌道、選鉱場に多額の資本を投じて、当時としてはかなり野心的な事業を展開した(注2)。しかし、鉱区の経営は思わしくなかった(注3)。

1889年、パンドラ鉱区はアーネストにボンド(条件付き売買契約)され、新聞記事は「He most likely will put the property on a paying basis(彼ならこの鉱区を採算ベースにのせられるだろう)」とパンドラ鉱区の復活に期待をよせている(注4)。しかし結局、1891年8月、パンドラ鉱区は他者に売却されることになった(注5)。

(3-2)パンドラ選鉱場(The Pandora mill)

これに対して、P&O社が山麓の集落ニューポートに建設した選鉱場は、まったく異なる評価を受けていた。鉱区経営が失敗に終わる一方で、この選鉱場は、立地・規模・機能のいずれの点でも優れていた。もともとこの選鉱場は、パンドラ鉱区とオリエンタル鉱区の金鉱石を処理するために建設されたものであったが、1884年頃からは他の鉱区の鉱石も受け入れるようになり、パンドラ選鉱場は次第に「地域の選鉱場」として機能し始めていった(注6)。

1884年9月、試験操業の結果に満足したアーネストは、大量の中・低品位鉱石をシェリダン鉱区からパンドラ選鉱場に出荷することを決断し(注7)、1885年1月には、1日35トンの鉱石を送る契約を結んだ(注8)。同年11月には、シェリダン鉱区の古いズリが再選別されたうえで、パンドラ選鉱場に運ばれていることも報じられている(注9)。1887年にシェリダン社がメンドタ鉱区を買収すると(本誌2025年秋号)、メンドタ鉱区からも、シェリダン鉱区経由で大量の鉱石が運ばれた(注10)。

こうしてマーシャル盆地のシェリダン、メンドタ、スマグラ、ユニオン、ベルモントといった鉱区から、中・低品位鉱石や過去の廃石までもが、次々にパンドラ選鉱場へ運び込まれた(注11)。これらは、スタンプで砕き、ヴァナーで選り分けることで、初めて価値を持つ鉱石である。ちなみに、肉眼で高品位と判別できる鉱石は、高額な輸送料をかけて山岳ルートを通り、シルバートンやダラス経由で、デュランゴ、デンバー、プエブロなどの製錬所へ直接送られた(注12)。

パンドラ選鉱場は、地域インフラとして昼夜を問わずフル稼働した。1887年には、処理を待つ鉱石が建屋の屋根近くまで積み上げられ、逼迫した状況にあったことが報じられている(注13)。

1887年11月、シェリダン社は自社専用の選鉱場建設を発表する(注14)。1888年8月には、すでに用地が確保され、近く工事を開始することが伝えられた(注15)。一方のP&O社は、マーシャル盆地の一鉱区をリース契約し、大口顧客を失った場合の対策とした(注16)。さらに、シェリダン社は建設予定地で用水路工事に着手したことが報じられる(注17)。

ところが同年10月、シェリダン社は方針を転じ、パンドラ選鉱場そのものを購入する。建設するより、購入するほうが安くて早いという判断だったのだろう。報道によれば、過去2年間にシェリダン社がP&O社へ支払った選鉱処理費だけで、購入価格を完全に賄えるという(注18)。選鉱を外注することが鉱山会社にとっていかに大きな負担であったか、当時の鉱山経営において、自社選鉱場の有無が収益を大きく左右していたことがよくわかる。余談だが、このパンドラ選鉱場購入には、弁護士J・G・タイラーも関与している(本誌2025年冬号)(注19)。

以後、選鉱場はアーネストによって全面的に再建された。

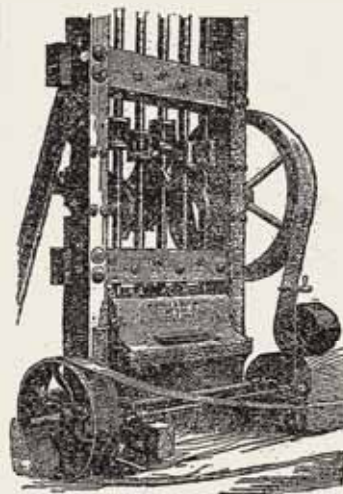


図1 5スタンプ・ミル
スタンプ・ミルは金属鉱山で広く用いられた粉碎装置(搗鉱機とも)のこと。重い鉄製スタンプ(搗鉱棒)5本を1組として落下させることで鉱石を砕いた。当時は「5スタンプ」を基本単位として、選鉱場のスペックを「20スタンプ」「40スタンプ」等と表現した。尚、スタンプミルは狭義では搗鉱機を指すが、広義ではスタンプを持つ選鉱施設全体を指す。ちなみにこの図は、Hendrie & Bolthoff Manufacturing Co.(本誌2024年夏号にも登場)の新聞広告から引用した。
出典:「Fairplay Flume」1885年11月26日

搗鉱機は当初20スタンプだったものが、最終的には40スタンプまで増設された(図1)。1スタンプあたりの重量は約850ポンド(約385kg)で、毎分およそ90回落下する。処理能力は最大で1日約100トンとされ、これは当時の山岳地帯における選鉱場としては極めて高い数値である。

大型のブレーク・クラッシャー(粗砕機)が2基設置され、鉱石はスタンプに送られる前に適切な粒度まで砕かれた。新聞には、1基で1日500トン进行处理できる能力があると記されている。フリー・ヴァナー(選鉱用ベルト装置)は、当初

9~12基だったものが、最終的には30基以上に増設された。

動力は水力と蒸気力が併用された。マーシャル川から引いた水を、約250フィート(約75m)の落差でペルトン水車に当て、スタンプ用とヴァナー用に別系統で動力を供給していた。水量が不足する冬季や渇水期には、合計230馬力級の蒸気機関が補助動力として用いられた。

さらに、冬季操業を可能にする蒸気暖房、夜間操業のための電灯設備(150~175灯)、機械修理用工場、本格的な試金室が併設されていた。新聞はこの試金室を「デンバーの優良設備にも劣らない」と評している(注20)。

(3-3) パンドラ

こうした巨大設備を支えたのが、集落としてのパンドラである。当初はニューポートと呼ばれていたが、州内に別のニューポートが存在することが判明し、1881年8月、選鉱場の名にちなみパンドラと改称された(注21)。1880年にP&O社が進出する以前はほぼ未開の地で、1881年にはまだ十数軒の家屋しかなかったが、その後急速に発展し(注22)、1883年にはサン・ミゲル郡の主要集落の一つに数えられるまでになった(注23)。選鉱場、倉庫、鉱石置き場、事務所、作業員住宅などが集中していた(注24)。

1890年11月、リオ・グランデ・サザン鉄道がテルライドまで開通し(注25)、1891年または1892年には貨物線がパンドラに延伸された(注26)。これにより、選鉱を経た精鉱や資材は、ここから積み出されるようになった。

1891年12月のインタビューで、アーネストは次のように述べている。

「鉄道の完成はテルライドの歴史に新しい時代を画しました。それは、選鉱場から製錬所までの運賃を1トンあたり7ドル50セント引き下げ、これまでズリ山に捨てていた鉱石を、利益をもって処理・出荷することを可能にしました。

オットー・ミアーズがリオ・グランデ・サザン鉄道をテルライドへ通す以前、私はシェリダンのズリ山に10万トンもの鉱石を捨ててきました。しかし今や、それらをすべて選鉱し、利益を得て出荷できます。現在目に見えている鉱石だけで、私は新たに一発の発破をかけることなく、4年間選鉱場を動かし続けることができるのです。」(注27)

この発言は、ズリを洗鉱すること、すなわちパンドラ選鉱場をフル稼働させることによって、事業の成功を確信したことを、率直に語ったものといえるだろう。



図2 パンドラ(1890年)
パンドラに所在するシェリダン選鉱場を、南側から見た景観。
出典:『The Rocky Mountain News』1890年10月14日



図3 パンドラ(1899年)
パンドラに所在する選鉱場群を、東側から撮影した写真。手前に見えるのはスマグラー・ユニオン選鉱場。
出典:『Telluride Journal』1899年12月30日



図4 パンドラ(2000年)
パンドラに所在する選鉱場の遺構を、西側から撮影した写真。右手に見える道路は、かつての鉄道線路跡である。2000年10月、筆者撮影。

(注)

- 1 『Colorado Mining Directory, 1883』1883年, 720-721頁。
- 2 『The Colorado Daily Chieftain』1880年9月16日, 4頁, 同1881年2月5日, 3頁, 同1883年11月29日, 5頁, 『The Solid Muldoon』1881年7月29日, 3頁, 『Ouray Times』1881年10月22日, 1頁, 同1882年1月10日, 1頁, 『San Miguel Journal』1882年1月14日, 1頁,
- 3 『Rico Record』1883年9月27日, 2頁, 『The Rocky Mountain News』1890年1月14日, 9頁。
- 4 『The Rocky Mountain News』1890年6月22日, 14頁, 『The Rocky Mountain News』1890年10月27日, 6頁。
- 5 『The Rocky Mountain News』1891年8月21日, 7頁。
- 6 『The Rocky Mountain News』1884年7月10日, 2頁, 同12月13日, 6頁, 同1887年5月10日, 2頁, 『Telluride Republican』1888年7月13日, 3頁
- 7 『The Rocky Mountain News』1884年9月22日, 6頁。
- 8 『The Rocky Mountain News』1885年11月15日, 7頁。
- 9 『The Rocky Mountain News』1885年1月22日, 3頁。
- 10 『The Queen Bee』1887年9月21日, 2頁, 同1888年7月25日, 2頁。
- 11 『The Solid Muldoon』1884年11月14日, 3頁, 同1886年7月9日, 3頁, 『The Rocky Mountain News』1884年11月24日, 7頁, 同1885年1月9日, 6頁, 同6月25日, 4頁, 同7月3日, 6頁。
- 12 『The Rocky Mountain News』1885年1月9日, 6頁, 『The Solid Muldoon』1886年7月9日, 3頁。
- 13 『The Silverton Democrat』1887年8月13日, 2頁。
- 14 『The Silverton Democrat』1887年11月19日, 2頁。
- 15 『The Solid Muldoon』1888年8月10日, 2頁, 『Telluride Republican』1888年8月24日, 3頁。
- 16 『Telluride Republican』1888年8月24日, 3頁。
- 17 『Telluride Republican』1888年8月31日, 2頁。
- 18 『Telluride Republican』1888年10月5日, 3頁。
- 19 『Telluride Republican』1888年10月12日, 3頁。
- 20 『The Solid Muldoon』1888年12月28日, 3頁, 『The Rocky Mountain News』1890年1月14日, 9頁, 同7月20日, 17頁, 同12月7日19頁。
- 21 『Ouray Times』1881年8月20日, 3頁。
- 22 『Ouray Times』1881年9月3日, 3頁, 『San Miguel Journal』1882年5月6日, 2頁。
- 23 『Colorado Mining Directory, 1883』1883年, 685頁。
- 24 『The Colorado Daily Chieftain』1883年11月29日, 5頁。
- 25 『The Rocky Mountain News』1890年11月24日, 2頁。
- 26 パンドラへの延伸は貨物線であり、駅舎は建設されず、時刻表への掲載もなかった。テルライド開通時のような式典も行われておらず、最初の列車がいつパンドラに到着したのかは明確ではない。延伸工事は1891年4月に開始されており、テルライドからの距離はわずか約2マイルであったこと、また駅舎を建設する必要もなかったことから、1891年、遅くとも1892年までにはパンドラに到達していたと考えられる。『The Solid Muldoon』1891年4月10日, 3頁。
- 27 『The Rocky Mountain News』1891年12月31日, 6頁。

街でみかける ファインスチールの施工例 その62



北陸新幹線敦賀駅

敦賀駅は、1882年に開業した歴史ある駅。そんな敦賀駅に、真新しい高架駅が姿を現した。駅舎デザインは、『空にうかぶ～自然に囲まれ、港を望む駅～』をコンセプトとしており、中央部にある斜めに張り出した塗装ガルバリウム鋼板製の大屋根は、敦賀市の鳥である“ユリカモメ”が飛翔する姿をイメージしている。デザインにはパブリック・インボルブメントという市民参加型の手法がとられ、敦賀市では、市民フォーラムを開設したり市内の小中学校や高校で生徒たちから意見を聞くといった意見交換を重ね、デザイン案をJRTTに推薦。その後、JRTTではさらに多くの人から意見を聞き、検討を重ね、デザインを深めていった。こうして多くの人々の思いを取り入れた北陸新幹線敦賀駅。駅周辺の景観にもマッチして、敦賀市の新しい顔として定着しつつある。





2 南茨木阪急ビル

2018年の大阪府北部地震で旧南茨木阪急ビルが大きく損傷したため、その後2019年から建て替え工事が進められ、2022年7月27日に全体竣工した。

地上3階建てで、まちの新しい顔となることを目指し、外観については、エスカレーター部分の壁面等をガラスカーテンウォールとし、駅に至る歩行空間がロータリーから見えるようにするなど、駅への動線を強調した開放的なデザインにした。地域の人々が日常的に利用できるよう、コンビニエンスストアやメディカルゾーン、飲食店舗が入居し、日々多くの人で賑わっている。



FINE STEEL!

ボクらは
「自在に変化」
進化した鉄!

ボクらは「自在に変化」進化した鉄!

ファインスチールは、鉄の長所を最大限に活かしながら、これからの家と暮らしにふさわしい特長を合わせ持つ、現代建築の最適な素材として注目を集めています。新しい住まいで始まる暮らしをより良いものに。ファインスチールが理想のカタチを実現します。

ボクらの
特長

地震につよい 表面がきれい 環境にやさしい

屋根材・壁材には **ファインスチール**



全国ファインスチール流通協議会

<http://www.zenkoku-fs.com>

